慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	トニ・モリスンの描く黒人男性とその母親たち
Sub Title	Sons and mothers in Toni Morrison's novels
Author	伊東, 暁代(Ito, Akiyo)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1993
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.62, (1993. 2) ,p.298(33)- 312(19)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00620001-0312

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

トニ・モリスンの描く黒人男性とその母親たち

伊東暁代

トニ・モリスンの小説で強烈な印象を残す人物を挙げるとすれば，*The Bluest Eye* の Pecola，*Sula* の Eva，*Song of Solomon* の Pilate，*Tar Baby* の Jadine，*Beloved* の Sethe など女性の名前ばかりが並ぶのではないだろうか。これは彼女の描きだそうとしているものが，長い間アメリカ社会の底辺に押さえつけられ様々な差別を受けながらも耐え忍んできた黒人女性たちの姿だからだと言えよう。モリスンだけではなく７０年代，８０年代に登場した多くの黒人女性作家たちが望んだのは，人種と性という二重の差別を課された黒人女性たちの境遇を世間に知らしめることであった。それまでの男性中心の黒人文学に女性を挿入しようとしたのである。そういった彼女たちの作品が女性で溢れていても不思議ではない。そして彼女たちからみれば抑圧者であった黒人男性が白人と同じぐらい手厳しく描写されていてもやはり仕方のないことであろう。こういった女性作家たちの中にあってモリスンもまた例外ではない。彼女の作品において白人は辛らつに攻撃される。そしてそこに登場する黒人女性が一概に力強いのに対して黒人男性は大抵が無力で無責任に映るのである。ではモリスンは黒人男性に批判的なのだろうか。彼女の作品をよく読むとそうとは言い難い。たとえ彼らの弱さを描いたとしても，モリスンはその原因となった社会的背景を示唆することを忘れないからである。また，モリスンの作品では母親と息子のつながりが強く，ここにも弱い男性の原因を見いだすことができる。この論文では彼女の描く男性に焦点をあて，彼らの弱さ，母親との

結びつき，そして理想的な男性とその持つ力について考察していく。

モリスンが白人と黒人とのあいだには埋めがたい溝があるとみなしていることは彼女の作品から明白である。*Tar* の Son は，"They [white folks and black folks] should work together sometimes, but they should not eat together or live together or sleep together," (*Tar*, 210) と白人と黒人の深い関わりを否定している。これが作家本人の意見だと判断するわけにはいかないが，彼女の気持ちを反映していることは確かであろう。モリスンの作品のほとんどが黒人のコミュニティーを舞台にしているのだが，そこには白人の及ぼしている「悪」影響が常に見え隠れしている。彼女は白人あるいは白人文化を非難することは辞さないし，エッセイなどでも白人との対立について書いている。特に，彼女にとって黒人女性と白人女性とのあいだに連帯はありえない。彼女が女性解放運動に積極的でないのは，この運動を白人女性のものとみなすからである。常に労動を強いられてきた黒人女性にとって，女性が社会に進出できるかどうかは問題ではない。黒人女性の地位向上というものがあるとすれば，それは黒人全体の地位向上からのみ生まれるべきなのである。

このように白人と黒人の隔たりを強調するモリスンなのだが，黒人女性と黒人男性とのあいだに対立があるとは考えていないようである。彼女はエッセイで黒人女性と黒人男性の関係について次のように書いている。

> There are strong similarities in the way black and white men treat women, and strong similarities in the way women of both races react. But the relationship is different in a very special way. For years in this country there was no one for black men to vent their rage on except black women. And for years black women accepted that rage--even regarded that acceptance as their unpleasant duty. But in doing so, they frequently kicked back, and they seem never to have become the 'true slave' that white women see in their own history. ("What the Black woman Thinks," 63)

黒人女性は黒人男性がその怒りをぶつけることのできる唯一の対象であっ

た。しかしモリスンは彼女たちが男性の「奴隷」となっていたわけではないと主張する。これは彼らのあいだには白人女性の訴えているような男女間の対立はないのだということと，さらにはもし男性に非があるとすればそれは女性にも責任があるのだということを意味している。つまり黒人女性が黒人男性の怒りをある意味では認めてきてしまったのだというのである。

モリスンは黒人男性を非難しないばかりか同情すらしているようである。彼女は黒人男性と黒人女性との違いを白人との関係に照らし合わせて次のように語っている。"Black women have found it impossible to respect white women. I mean they never had what black men have had for white men--a feeling of awe at their accomplishments. Black women have no abiding admiration of white women as competent complete people." ("What the Black Woman Thinks," 64) 黒人男性にとって白人男性が憧れ，嫉み，畏怖の対象であったのに対して（というのも白人男性は空を飛んだり，機械を操ったり，物を造ったりなど黒人男性には禁じられていたことすべてを為すことができた），黒人女性にとって白人女性は世話をしてやらなければならない以外は何でもない存在だったというのである。黒人男性が白人男性によって子供扱いされたと同じように，白人女性は黒人女性に面倒を見てもらわなければならなかった。そのため奴隷制のあるいはその後のアメリカ社会は，黒人男性から「男／父親」であることを奪っても黒人女性から「女／母親」であることは奪わなかったのである。このことは，これからモリスンの描く男性を見ていくうえで重要になる。

黒人女性作家の描く黒人男性像がしばしば批判の的となるのは，作品中の彼らがあまりに無力あるいは無責任あるいは黒人女性に対してのみひどく乱暴であったりするからである。モリスンの作品でも，*Bluest* の Cholly は娘を強姦してしまい，*Sula* の Boy Boy は貧困の中に家族を置き去りにし，*Song* の Milkman は長年の恋人を礼状一つで捨ててしまう。

Tar の Son は人種差別には敏感で同じ黒人に対する思いやりには溢れているものの，女性に関しては，"They [plants] like women, you have to

jack them up every once in a while. Make em act nice, like they're supossed to," (*Tar*, 148) などと平気で言う。*Beloved* の Halle は妻が白人たちに押さえつけられ乳を奪われるのを目撃すると助けるかわりに発狂してしまう。このようにモリスンの描く黒人男性は理想的とは言い難いのである。理想的でないばかりか，「大人」になり切れていない男性が数多い。彼らが「子供」であることはその呼び名によって如実に示されている。*Sula* の Sweet Plum, Tar Baby, *Song* の Milkman, *Tar* の Son 等である。しかし，彼女の作品には尊敬すべき男性も登場してはいる。たとえば，*Song* の Macon Dead (Jake) は土地を所有し畑仕事に従事して家族を支えていた。彼の息子 Macon Dead, Jr. は小さい頃から父親と並んで畑を耕したことをいつまでも誇りに思っている。そして彼自身もやり方はどうあれ働いて一財を築くのである。*Bluest* の Frieda と Claudia の父親は貧しいながらもクリスマスになれば子供たちに贈り物を買ってやり，娘にいたずらをしようとする男がいれば殺してやると息巻く。このようにモリスンは男性のネガティブな面だけを捉えようとしているのではない。

また，彼女の描く男たちは文化的な要素を欠いているわけでもない。モリスンがその作品すべてを通じて訴えようとしていることの一つは黒人としての意識を失わずに黒人文化の伝統を保ち続けることだと言えよう。そして彼女はこういった文化の継承者／担い手として母あるいは祖母といった女性を選んでいるようではある。しかしだからといって彼女は男性を「語り」や「歌」といった伝承から無縁のものとはしていないのである。*Bluest* の Blue Jack はいつも Cholly にいろいろな話を語って聞かせていた。*Song* には男たちが互いに話を披露しあう場面がある。これは Emmett Till の事件をラジオで聴いた直後のことである。まずいろいろな意見が矢継ぎ早に飛び交う。その後は次のように描写されている。"The men began to trade tales of atrocities, first stories they had heard, then those they'd witnessed, and finally the things that had happened to themselves." (*Song*, 82) Milkman に注目すると，こういった話の交換が男たちのあいだでいかに重要か読み取ることができる。彼らの会話に全く加

われないあるいは加わろうとしない Milkman は明らかに彼らの仲間ではなく孤立しているのである。Milkman が「大人」でないのは彼がまず家族を愛せないからであり，そしてさらに男たちから疎外されているからである。だからこそ彼が成長していく過程の第一歩は Shalimar で男たちと戦って彼らに認めてもらうことだった。

さらに，*Sula* でモリスンは黒人女性同士の絆を強調したのだが，*Song* では黒人男性同士の深い結びつきが描かれている。たとえば秘密結社 Seven Days の結束はじつに固い。また，Milkman は最後に Guitar に向かって飛び降りるのだが，これは彼の「兄弟」に対する一種の愛情表現だとも考えられよう。そしてまた，モリスンが黒人男性の現状に関心をもっていることが劇 "Dreaming Emmett"を書いたときにインタビューにこたえて次のように語ったことから分かる。"There are these young black men getting shot all over the country today, not because they were stealing but because they're black . . . and no one remembers how any of them looked. No one ever remembers the facts of each case." (Croyden, 6) 彼女は彼らのことを憂えそして理解しようとするのである。

だからこそ，モリスンの描く男性の多くが無力で事実上去勢されていたとしても，彼女は歴史的あるいは社会的な背景を明らかにすることによって彼らの弱さを説明しているのである。たとえば *Beloved* では，いかに奴隷制度が黒人男性から「男」であることを奪ってしまったかが描かれている。勿論この作品は奴隷制度の悲惨さや残酷さをいろいろな角度から映しだしており，これはその一面にすぎない。小説の前半で Halle は理想的な息子／夫／父親として登場する。彼は五年間ものあいだ日曜日も働くことによって母親 Baby Suggs を買いとった。妻 Sethe によっては優しい兄のような存在であった。娘 Denver は一度も会ったことがない彼を "angel man" (*Beloved*, 208) と呼び，いつか自分を迎えに来てくれるのだと信じている。しかしこんな Halle であっても奴隷制度の前には屈してしまう。妻が白人によってなぶられるのを目撃すると発狂してしまうのである。一日の休みもなく働き，その上身重の妻と三人の幼児を連れての逃亡を企てな

ければならなかった彼の立場を考慮すれば，精神的に参ってしまったのも納得がいく。彼は決して無責任ではなかったのである。

Bluest の Cholly にも同じようなことが言える。彼もまた白人によって「男」を否定されてしまったのである。初めての体験の際に白人に見つけられたあげく銃を突きつけられて止めないように命令されたことから彼の性は歪んでしまう。こういう伏線があるからこそ，小説の最後で彼が娘を強姦しても理解できなくはないのである。白人の前で性交を演出させられた Cholly は白人にではなく相手の黒人の少女に怒りをぶつけた。モリスンが述べたように白人に不当に扱われた黒人男性は黒人女性にそのはけ口を見いだすのである。*Sula* の Jude もまた，道路工事といった力仕事を熱望していたのにもかかわらず黒人であるがために仕事を得られないと結婚を決意する。"[I]t was rage, rage and a determination to take on man's role anyhow that made him press Nel about settling down." (*Sula*, 82) 「男」を誇示するために結婚するのだとモリスンは書く。黒人男性が無力に映るとすれば，それは彼らに機会を与えようとしないアメリカ社会に責任があるのだということを彼女ははっきりと示しているのである。先に挙げた尊敬すべき男たちも結局は白人に押し潰されていく。Macon Dead (Jade) は土地をだまし取られたあげく撃ち殺され，Mecon Dead Jr. は白人中心社会でのし上がるために他の黒人から搾取する。Claudia と Frieda の家庭にしても貧困にあえいでいる。黒人男性がアメリカ社会で置かれている位置を考えれば，ただ彼らだけを批判するわけには当然いかないのである。

Barbara Hill Rigney はモリスンの描く黒人男性がやはり去勢されていて子供扱いされていることを指摘している。そしてモリスンはその原因をも著しているのだと続けている。興味深いのは Rigney がここで歴史的背景以外にもモリスンの描く母親の存在に着目していることである。

> Male impotence and images of castration, whether created by female submission or female power, are certainly problematic for a great many readers and critics of Morrison's work as well as that

of other black American women writers. . . [O]ne must agree that a great many of Morrison's male characters are, in fact, psychological and economic disasters, symbolically castrated and rendered infantile and ineffectual. In her novels, however, such depictions are most often justified by historical conditions and explicable by at least the partial responsibility of her female characters, most obviously those archaic and phallic mothers. . . . (89)

Rigney の主張するようにモリスンは黒人女性にもその批判の眼を向けている。先に *Sula* では男性の名前から彼らが子供扱いされていることがうかがえると述べた。これら Sweet Plum, Tar Baby といった名前を与えているのは Peace 家の専制君主 Eva である。モリスンの作品には彼女のように破壊的とまで言えるような強大な力を持つ母親が登場する。その力は子供の生死をも決定するのである。Eva は麻薬中毒で廃人同様の息子を殺してやり，*Beloved* の Sethe もまたせっかく逃がした子供たちをまた奴隷にされるぐらいならばと自ら殺そうとする。

Bluest や *Song* でも直接的ではないものの母親たちはやはり死の原因となっている。*Bluest* においてモリスンは黒人たちのあいだに愛がないのは白人によって直接あるいは間接的に影響された結果だと示唆している。彼らが白人の価値観を受け入れさせられ，黒人的なものを捨て去っているからだと考えるのである。その価値観とは美しさに関するものであり，白い肌，青い眼，金髪を美しいとする白人の規準を受け入れてしまった黒人たちはこういった美しさに欠ける自分たちを蔑んでしまうのである。黒人にとって白人的な美しさは愛されるための資格ともなる。Pecola はその醜さゆえに愛されない。母親 Pauline は醜い自分の子供を可愛がるかわりに勤め先の美しい白人の子供に愛情を注いでしまうのである。美しくなれば母親も自分を愛してくれるだろうと思う Pecola は誰にも負けないぐらい青い眼が欲しいと願う。このように Pauline は娘を完全に見捨てているのである。それだけでなく父親の子供を身ごもってしまった彼女をさんざん殴りつける。そのせいかどうか Pecola は早産してしまい赤ん坊は死んでし

まう。Pauline に母親としての自覚や理解さえあればこの死は避けられるはずであった。同じように，*Sula* の Hannah は友人に漏らした一言から一人の少年の死を間接的に招いてしまう。母親が自分を好いていないと言うのを立ち聞きしてしまった Sula は，その直後に Chicken Little を誤って川に投げ込んでしまうのだが助けようとはしないのである。Hannah の一言は Sula にとってそれほど致命的だった。

Song の Pilate もまた知らず知らずに孫娘 Hagar を死に追いやってしまう。Hagar は Pliate だけでなく母親 Reba にも甘やかされ，欲しいものはすべて与えられて育った。そんな彼女は Milkman に捨てられると生きていけなくなってしまう。Guitar は彼女をこう分析している。

> Pretty woman. . . . Who wanted to kill for love, die for love. They were always women who had been spoiled children. Whose whims had been taken seriously by adults and who grew up to be the stingiest, greediest people on earth and out of their stinginess grew their stingy little love that ate everything in sight. They could not believe or accept the fact that they were unloved; they believed that the world itself was off belance when it appeared as though they were not loved. (*Song*, 306)

あまりに甘やかされた彼女は愛されないということが受け入れられないような人間になってしまった。そして Milkman の拒絶から立ち直れないまま死んでいった Hagar をもろく育ててしまったのは Pilate なのである。しかしこういった破壊的な女性たちは逆に子供を死から救うこともできる。Eva は死にかけた赤ん坊の Plum を助け，Pilate は Milkman を生まれさすまいとする父親から守りとおした。

このように母親たちは絶大な力を持っている。そして，こういった母親たちにとってその子供は非常に大切なものであり，特に息子は特別の意味を持つのである。たとえば Baby Suggs は「息子」と「男」を区別している。"'A man ain't nothing but a man. But a Son? Well now, that's somebody.'" (*Beloved*, 23) 実際モリスンの作品に現れる母と息子の関係は

近親相姦的なものが多い。Ruth と Milkman の関係は明らかにそうである。夫に性交を拒まれた Ruth はすでに赤ん坊ではない息子に乳を吸ってもらうことによってその欲求を満たそうとする。Lena は Milkman を男であるという理由だけで姉である彼女や Corinthians にはないような特権を得てきたのだと非難している。しかしこれは母親にも責任がある。彼女こそが彼を甘やかせていた張本人だからである。*Sula* の Eva と Plum もまた近親相姦に近い関係にある。Eve によれば Plum は母親の胎内に戻ろうとしたのであり，彼女はそうできないかわりに火をつけて殺してやったというのである。この作品では他にも Ajax が母親に異常な執着心を持っている。

また，*Tar* の Son が「息子」であることはその名前から明らかである。勿論 Son が「男」ではなく「母親」を象徴していると考えることはできる。事実 Jadine と Son との不和は男女の不和というよりも，彼らが象徴している二つの考え方の衝突だと言える。Marilyn Sanders Mobley はこの作品を次のように解説している。

> While on one level *Tar Baby* appears to be simply the story of a failed love affair between a man and a woman with diametrically opposed values and life-styles, on a deeper level, the novel is about the disparity Morrison sees between the women of her remembered past and the women of the present epitomized in the character of Jadine. (135-36)

Jadine が闘っていたのは「母親」だというのである。彼女は小説の最後で Son から逃れられた自分を褒めている。一人であることに誇りを持つのである。しかし，彼女が小説の最初に自分に欠けていると感じそして求めていたのは「男」ではなく「母親」であり，黄色い服を着た女とはまさにそういった存在であった。また Jadine は Son の故郷 Eloe で "night women" に遭遇するのだが，彼女たちは皆乳房を見せびらかせて女性の母親としての価値を強調する。そういった母親たちから逃げだした Jadine は黒人女性であることを拒絶したのである。だからこそ彼女は "lean and

male"(*Tar*, 275)だと感じた。Jadine は Son を否定することによって彼が象徴している「母親」を否定したのである。

しかし Son を母親の象徴とは見なさずに，単に母親から離れられなかった息子と見ることもできるのではないだろうか。Jadine が問い詰めたところ Son というのは彼の本名ではない。しかし彼によれば皆そう呼ぶのである。おもしろいことに Jadine は彼を Son と呼びたがらない。"'But I can't call you Son. "Hi, Son. Come here, Son." I sound like a grandmother. Give me something else.'" (*Tar*, 174) このときの彼女はまだ知らなかったのだが，彼は確かに女たちの「息子」であった。故郷 Eloe の女たちだけでなく Isle des Chevaliers の Thérèse にも大切にされ導かれるのである。Jadine は彼との破局を迎えたときにこう振り返る。"She thought she was rescuing him from the night women who wanted him feeling superior in a cradle, deferring to him . . . ." (*Tar*, 269) 彼は「母親」たちの支配下にあったというのである。そのため Jadine の "Mama-spoiled black man, will you mature with me?" (*Tar*, 269) という想いも虚しく響く。Rigney はこう書いている。"At the end of the novel, beaten by a world in which there is no place for him, abandoned by Jadine, Son returns to the mother, reenters the womb symbolized by the swamp . . . ." (14) Son が母親の具現である大地に戻ったというのである。*Sula* の Plum のように Son もまた母親の胎内に逃げこんでしまった。こういった母親から離れられない息子たちは立派な「大人の男」にはなれず，だからこそ恋人や妻との関係もうまく保てないのだと与えられよう。

Rigney によればモリスンは忠告を与えている。"[I]f women participate in the castration of men, whether through love or malice (both and either of which is effective toward this end), they will end up with no men at all, only children." (89) もし黒人男性が「男」でないとすれば，それは母親たちにも責任があるというのである。すると先ほどの "Mama-spoiled black man, will you mature with me?" という問いは黒人男性だけ

ではなく黒人女性にも向けられたものではないかと考えられる。興味深いことにモリスンの作品の中で逃避しない数少ない男性の一人，*Beloved* の Paul D には母親がいないだけでなく，その代理となるほかの母親的存在もないのである。彼はまさに奴隷制度の落とし子であり，その中でさんざんな目にあいながら生きてきた。そして数々の試練に耐えながらもやはり奴隷制度を生き抜いてきた Sethe が最後に結ばれるのはこの Paul D なのである。Halle と同じように彼もまた黒人男性を「男」と見なさない社会で苦しんだはずである。それでも彼は二十年も経った後でも Sethe を捜し求めてやってくる。彼の強さあるいは Halle との違いはどこにあるのだろうか。このことを考察するためにはモリスンの重要なテーマのひとつである愛について理解する必要がある。

モリスンはインタビューで，"[A]ll the time that I write, I'm writing about love or its absence," ("Seams Can't Show," 56) と語っている。実際愛は彼女の作品の主題となっているだけではなく，物語を進める推進力ともなっている。というのも様々な登場人物たちは愛によって決定的行為を犯すのである。愛するがゆえに父は娘を強姦し母は息子を殺してやる。子を想うからこそ母は自らの足を犠牲にしあるいは自ら子の命を断つ。モリスンは親子の愛，男女の愛だけでなく女同士あるいは男同士の愛，またもっと博愛的な愛などいろいろな愛を描いている。彼女がそれらをどのように描き出しているかはここでは述べないが，どのような愛を理想としているかを考えてみる。*Bluest* の語り手 Claudia はクリスマスの贈り物として人形を貰ったときにこう思う。"[N]obody ever asked me what I wanted for Christmas. Had any adult with the power to fulfill my desires taken me seriously and asked me what I wanted, they would have known that I did not want to have anything to own, or to possess any object. I wanted rather to feel something on Christmas day." (*Bluest*, 24) 彼女が求めたのは物質的な所有物ではなく精神的なもの，人との結びつきといったものなのである。こういった精神的な支えを理想的な愛だとすれば，両親にないがしろにされている Pecola には愛が欠けている

と言える。

Sula や Nel にしても同じであった。どちらにとっても親は支えとなっていないのである。二人の出会いをモリスンはこう描写している。"Their meeting was fortunate, for it let them use each other to grow on. Daughters of distant mothers and incomprehensible fathers . . . ." (*Sula*, 52) 彼女たちは互いの上に育つことができたというのである。ここからさらに，モリスンの考える愛とは人を育む力あるいは養う力なのではないかと考えられる。*Song* の Hagar はある意味では愛情一杯に育った。母親と祖母の二人に甘やかされた彼女はは欲しいものは何でも手に入れてきたのである。それなのに彼女は破滅の道をたどる。Guitar は彼女をこう理解する。"She needed what most colored girls needed: a chorus of mamas, grandmamas, aunts, cousins, sisters, neighbors, Sunday school teachers, best girl friends . . . ." (*Song*, 307) Hagar が必要としたのは Claudia が望んだような精神的な結びつきなのである。彼女をはそれを恋人 Milkman に求めたのだが，大人になりきれていない彼には人を育むような力はなかった。Macon Dead, Jr. は "'I worked right alongside my father. . . . From the time I was four or five we worked together,'" (*Song*, 51) と息子に自慢するのだが，ここにもやはり強い精神的な結びつきが見られる。そして彼は一緒に働き精神的な支えであった父親が白人によって殺されると人が変わってしまうのである。*Tar* の Jadine もまた愛を欠いている。彼女はこういったものを求めるよりも前に白人の「保護者」Valerian にまさに育てられてしまったのである。

もし人を育む力を真の愛だと考えるならば，モリスンの作品は偽りの愛で溢れていると言える。たとえば所有しようとする愛がそうである。これは特に女性に多い。*Sula* で Ajax が Sula から逃げ出そうとするのは彼女の所有物になりたくなかったからであり，*Beloved* の Paul D も同じことを出会った女性たちから感じている。さらに，Sethe の子供たちに対する愛は所有愛である。他人に所有されるといったおぞましい奴隷制度から解放された彼女あるいはほかの女性たちがまず試みたのは他人を所有しようと

することだったのである。また，Eva のような支配しようとする愛も真の愛からはほど遠い。人の生死を決定し名前を与え人種までも決めてしまう彼女は神のようにふるまうのである。*Song* の Guitar の博愛主義的な愛も歪んでいる。彼は秘密結社に属し白人を殺す理由を Milkman にこう述べている。"'What I'm doing ain't hating white people. It's about loving us. About loving you. My whole life is love.'" (*Song*, 159) しかし彼の言う愛とは重荷になる愛であった。秘密結社の一員 Robert Smith は自殺を図り，Porter も一時的ではあるが精神的に参ってしまうのである。

そんな中で *Beloved* は楽観的な小説だと言える。それというのも最終的に Sethe も Denver も精神的支え，愛を得るからである。Paul D が Sethe にかける "You, your best thing," (*Beloved*, 273) という言葉こそ愛の言葉ではないだろうか。彼女に自信を与え導くようなこの言葉は Sethe を養うのである。Barbara Schapiro も Paul D をこう評している。"While paul D plays the role of the saving other in contradistinction to Beloved and the narcissistic dyad, he does not represent the typical world of the father. . . . His power lies precisely in his maternal, nurturing quality . . . ." (204) 彼の持つ力とは母親的な養う力なのだと。同じように Nelson Lord の "Take care of yourself, Denver," (*Beloved*, 273) という一言が Denver を救う。実際この作品では男たちが救い主となっている。確かに Sethe は強い女性である。どんな目にあっても屈することはなかった。どうして自分も夫のように気が狂ってしまえなかったのだろうと恨むぐらいである。しかし彼女の子供たちに対する愛は所有しようとする愛であり，彼女には人を育むあるいは養うような力はない。事実 Denver を精神的に支えてきたのは祖母 Baby Suggs と父 Halle なのである。とくに Halle は彼女にとっては理想的な "angel man" であった。Baby Suggs から聞かされた話から想像した父親は完璧な男性であり，いつか彼女を迎えに来てくれることになっていた。こういった心のよりどころがあったからこそ Denver は Sethe や Beloved を助けようと思うのである。そんな彼女をモリスンは "her father's daughter after all," (*Beloved*,

272) と形容している。

この人を育むあるいは養う愛は，親子，男女，男性同士，女性同士の区別なくすべての愛に共通するのである。モリスンは作品，エッセイなどを通じて過去の重要性を説いている。彼女によれば過去は養う力を持つのである。黒人としてのアイデンティティーを認識し，自己に誇りを持つために過去は必要だと言う。そして，養う力を持つのは過去だけでなく，人との結びつき，精神的な支えもまたそうなのである。精神的に支えあうことはコミュニティーに体現される。だからこそモリスンは都市から消えてしまったコミュニティーを取り戻そうとするのである。家族や個々の人間のレベルにおいても同じで，互いに養う力が重要なのである。こういったものが一番見られる作品が *Beloved* であり人物が Paul D だと言える。彼こそ理想の男性ではないだろうか。勿論彼には弱さもある。Beloved の誘惑に負けてしまい，Sethe の子殺しの過去を知ると一度は逃げてしまう。それでも彼は Sethe のところに戻ってくる。互いに支えあって生きていくことを望んで。Paul D はモリスンの理想とする愛である人を育み養う力に溢れた人物なのである。彼女の作品で他にこのような人物は見られない。彼が一番モリスンの理想に近いと言えよう。もっとも彼には「母親」がいないということを見過ごしてはならない。モリスンの描く男たちの「弱さ」の原因は母親たちにもあるからである。社会や女性にも非を見いだすモリスンは黒人男性だけを批判するようなことは決してしないのである。

Works Cited

Croyden, Margaret. "Toni Morrison Tries Her Hand At Playwriting." *New York* Times 29 Sep. 1985: H6+.

Mobley, Marilyn Sanders. "Myth as Usable Past: Affirmation of Community and Self in *Song of Solomon*." *Folk Roots and Mythic Wings in Sarah Orne Jewett and Toni Morrison: The Cultural Function of Narrative*. Baton Rouge: Louisiana State UP, 1991. 91-133.

Morrison, Toni. *Beloved*. New York: Knopf, 1987.

——. *The Bluest Eye*. 1970. Gt. Brit.: Triad Grafton, 1981.

——. *Song of Solomon*. New York: Knopf, 1977.

——. *Sula*. New York: Knopf, 1973.

——. *Tar Baby*. New York: knopf, 1981.

——. "What the Black Woman Thinks About Women's Lib." *New York Times Magazine* 22 Aug. 1971: 14+.

——. Interview. "The Seams Can't Show: An Interview with Toni Morrison." By Jane S. Bakerman. *Black American Literature Forum* 12 (1978): 56.

Rigney, Barbara Hill. *The Voices of Toni Morrison*. Columbus: Ohio State UP, 1991.

Schapiro, Barbara. "The Bonds of Lovve and the Boundaries of Self in Toni Morrison's Beloved." *Contemporary Literature 32. 2 (1991): 194-210.*